日本語の引用表現研究の概観
－習得研究に向けて－

杉浦　まそみ子

要　旨

これまで行われた引用表現に関する言語学的研究から、まず、引用標識「と」、「と」による引用表現、引用句とオノマトペ表現、直接話法と間接話法の 4 項目に焦点をあてて統語的研究を概観する。そののち、談話分析的観点から、引用表現が談話構造の中でどのような機能を果たしうるかについての研究をまとめる。習得研究については、第二言語としての日本語の引用の習得研究はまだ少ないため、これまで引用表現に関連する L1 および L2 日本語の習得研究を紹介し、引用表現研究から得られた示唆を基に、これからの習得研究を目指すためのアプローチを探る。

【キーワード】引用表現、　「と」、　オノマトペ表現、　話法、　第二言語習得

1. はじめに

「引用」とは基本的に進行中の場とは異なる時空での発話や思考を進行中の場に取り入れる言語行為である。その表現形式は複文的構造や視点表現とかかわってくることもあり、適切な使用は学習者にとってそれほど容易ではない。例えば、ある程度日本語能力がある学習者でも「友達が、明日来ると言った」という言うべきところを「友達が言った、明日来ます」と言うことがある。この不自然な文から引用標識、語順、引用句の文体といった困難点がうかがわれるが、習得研究であきらかにされているとはいえない。

引用表現の習得研究を進めるにはどのようなアプローチが可能であろうか。これまで行われてきた引用表現についての統語的研究や語用論的研究を概観しつつ、第二言語での「引用」の習得研究を進める上での観点を探る。

本稿では、次の第 2 節では今までに行われた引用表現に関する研究について概観し、第 3 節では引用表現の習得研究についてまとめる。引用表現の習得研究は非常に限られているため、生成文法の観点から引用表現と関連すると思われる補文構造の研究も紹介する。第 4 節で引用研究の問題点と習得研究に向けてのアプローチを考える。

2. 引用表現の研究

2.1 引用と話法

引用研究において「引用」と「話法」は研究者によって定義がまちまちである。まず、本稿での定義を明確にしておきたい。

『日本語教育事典』[1]では「引用」とは、他人や自分の言語・思考・判断・知覚などの内容を表現の素材として用いる表現形式で、引用句に助詞「と」を付けて、言語・思考などを表す動詞に続ける形をとると定義されている。一方、「話法」とは言語主体が発話された言葉を引用して表現する方法で、助詞の「と」だけでなく「～由」「～旨」等の形式も使用されるとしている。つまり、引用と話法の違いについては、引用は言語化されていない内容をも素材とし、「と」で引用されるのに対し、話法では言語化されたものを直接の素材とし「と」や他の形式で表現される点で異なっているわけである。さらに、話法については「自分の発話の中に別（または副時）の発話を引用する形式」（『国語学辞典』[2]）とか、「・・ように」「・・ことを」という形式を話法の問題から除外し基本的に「～と」をとる形式のみ話法として扱うもの（三上 1953，1972）もあり、定義は定まっていない。

砂川（1988，1989）、鎌田（2000）も「引用」と「話法」についてそれぞれの定義を示している。

砂川（1988）では引用について「太郎は旅行に

行こうと言った」という花子が言った文を例にあげ、ここでは、花子の発言が成立している場と太郎の発言が成立している場という二つの時空間的場面があり、花子は異なった場面における太郎の発言を再現しており、この「再現」を「引用」とすると定義している。そして、引用という機能にかかわりをもつ表現としては、「と」だけが、話し手の場に元の発言や思考の場を再現させる機能を果たしうるものであるという理由から、「引用」を「～と」で表す形式だけに限っている。したがって、発言や思考の内容を伝える表現である「～ことを（希望する）」「～旨」「かどうか」「～か」や、さらには、形容詞「～く」（故郷が懐かしく思い出される）、形容動詞「～に」（その作業は始めは簡単に思われた）、動詞「～て」（彼はかなり老けて見える）、助動詞の「～たく」「～ように」「～らしく」といった副詞的修飾句を受けて認知、認識といった自発的な思考作用を表すもの、さらに、「～ように」などの行為指示動詞とともに表されるものは「話法」の問題として扱うべきとしている。

一方、鎌田（2000）は、「引用」はある場で成立した思考ないしは発言を別の発言の場に「取り込む」行為とし、「と」で受ける表現に限定せず伝聞表現の「～そうだ」や行為指示表現の「～ように」なども「引用」に含めることを主張している。そして、引用を表現する形式を「話法」と定義している。つまり、砂川がいろいろな話法の中で二重の場を再現させる機能を果たしうるものとして「と」による表現のみを「引用」としたのに対し、鎌田は「引用」はある場で成立した思考や発言を新たな場に「取り込む」行為であるとし、「と」を伴う表現も伴わない表現も「引用」に含めている。

引用の習得研究は学習者が他の場で表現された発話や概念を進行中の会話の中で伝達する表現形式などの習得過程を記述することを目的とする。「引用」を「と」に限定せず、さまざまな形式とすることによって、より包括的な引用構造の習得過程の記述が可能になる。この立場から筆者は「引用」を「と」による表現のみならずさまざまな形式も含むとし、「引用」を表現する言語形式を「話法」とする鎌田の立場をとる。

本稿でまず引用表現[3]のうちで最も引用らしい形式である「と」（「って」）による引用に関する研究に焦点をあて概観する。本節の 2.2 の.統語的研究においては、2.2.1 で引用の標識「と」に注目した研究、2.2.2 では「と」を使用した引用表現、2.2.3 で引用句とオノマトペ表現とのかかわりについて、そして 2.2.4 で「話法」についての研究をまとめ、2.3 で談話分析の観点からの引用表現研究を概観する。

2.2 統語的研究

2.2.1 引用標識「と」に関する研究

柴谷（1978）久野（1973）砂川（1988）

柴谷（1978）は「と」と話法を関連づけた分析を行っている。引用文の表層構造では、直接引用、間接引用ともに「引用句」[4]が「と」によって文に埋め込まれるが、両者の違いは深層構造の違いにあるとしている。すなわち、直接引用（「おい」とぼくは言った）では「引用句」の下にどのような表現が挿入されてもよい「引用」という節点を設け、間接引用では節点「引用句」は「文」を支配しているとし、二つの話法を区別している。

また、「と」でくくられる「引用句」は補文標識「こと」「の」でくくられる句と違って助詞の「が」「を」がつかないことから、名詞節を構成しない副詞節であるとし、その点でオノマトペ的表現（松子ははっと言葉を切った。）を同じ働きであると指摘している。

久野（1973）は「と」と動詞の目的節を示す「こと」「の」を引用句の命題の真偽という観点から分析している。この「こと」「の」と「と」には明瞭な違いがあり、前者にはその節が表す動作、状態、出来事が真であるという話者の前提が含まれているが、「と」で終わる名詞句にはそのような前提は含まれていないと分析している。

(1)　彼はマリコが不運だと思った。
(2)　*彼はマリコが不運なことを思った。
(3)　*彼はマリコが不運だと忘れた。
(4)　彼はマリコが不運なことを忘れた。
(5)　彼はマリコが不運だと嘆いた。
(6)　彼はマリコが不運なことを嘆いた。

（作例）

たとえば「こと」は命題が真であるという前提を含んでいるため、話者の前提を含んでいない動詞「思う」は共起できない。一方、前提を含まない句を引用する「と」は話者の前提を含んでいる動詞「忘れる」と共起できない。そして、「と」と「こと」の両方をとることができる動詞「嘆く」では、(5) では、話者はマリコが幸運だとも不運だとも言ってい

ないが、(6) では、話者はマリコが不運であることを前提としていると解釈され、両者に微妙な意味の違いが生じると指摘している。つまり、「と」は命題が真であるという前提なしに使用される標識であると指摘している。

砂川（1988）も「と」と「こと」の違いに注目し、引用動詞を含めた述語動詞で「～と」しか伴わない動詞と「こと」しか伴わない動詞の比較から、「～と」は文全体の発言の場の中に組み込まれた別の発言の場や思考の場に即した「内容」が表されているのに対し、「こと」では文全体が話し手によってとらえられ、別の位相にある発言や思考の場は関与していない対象化された事柄が表された「対象」が表されているとしている。

山崎（1993，1996）

山崎（1993）では引用の「と」を広くとらえ、類型化を試みる研究を行っている。ここでは「と」の範囲を引用表現だけでなく、「幅は45cmとコンパクトサイズ」のような客観的内容を提示する「と」にまで対象を拡大して分析を行っている。また、山崎（1996）ではこれまで「と」に限定されてきた引用表現研究を「って」にひろげ、引用、伝聞の「って」について分析を行っている。引用の「って」は、「と」に比べると文体的にカジュアルというだけではなくもっぱら発話・思考を提示する形式で、「って」の中には一つの複合形式と考えられる「だって・んだって」があることを指摘している。そして「って」や「だって・んだって」は情報伝達、情報確認、情報のそのままの提示などに用法が限定されていると分析している。

つまり、「と」による引用句は補文標識とは異なる副詞節的性格をもつことや、命題の真偽に対する話者の前提を含まず、また認知した事柄を対象化せずに直接伝達することが示され、「と」と「こと」の違いが明らかになっている。さらに、「と」の例示機能や「って」や「だって・んだって」の情報提示機能なども明らかにされてきた。

これらの研究から引用表現における「と」と「こと」に注目した習得研究へのアプローチや副詞節の習得に焦点を当てる研究が考えられる。また、「って」や、引用の「と」の意味機能の拡大に注目したアプローチも可能であろう。

学習者では「と」や「って」など引用標識の選択の不自然さだけでなく、引用句・引用標識・引用動詞に関する語順や省略などにも問題がうかがわれるところから、統語的、類型学的、情報構造的といった観点からアプローチが考えられる。

2.2.2 「と」による引用表現

藤田（1988，1999）砂川（1989）

藤田（1988）は、「と」でくくられる「引用成分」が、後続する思考、認知、言語行動を意味する動詞などに「内容」として関係し、その関係がセンテンスにおいて成立する統辞現象を引用ととらえ、「と」を伴うオノマトペ表現とも連続する副詞的修飾句であるとの統語的位置づけを行っている。そして、「引用成分」と動詞のかかわり方によって、引用表現をα類とβ類に類型化している。

まず、α類は「と」によって示される発話（心内発話も含む）と述部によって示される別の動作・状態とが同一場面に共存するか、もしくは、密接に連続するものである。基本的に引用句の発話の主体と述部の示す動作・状態の主体が同じもので、(7)(8) のようなものである。

(7) 福田が「オッス」と入ってきた。

(8) 「どっこい」と膝をつくと・・・

（藤田 1988:35）

β類は、「と」で示される発話、心内の思惟、認知と述部の示す動作や状態とが事実上一致するもので、述部は引用句に示される現実の発話や思惟の名付けや特徴付けを行うことができる。名付けには発話を外的に特徴づけるもの (9)、心の状態を特徴づけるもの (10)、発語内的行為[5]の観点からの特徴づけ (11)、発語媒介行為の観点からの特徴づけ (12) などをあげている。

(9) 「今はない。もう少し待て」と木ではなをくくったような返答だ。

(10) それだけのことだったのかと与六はすこし失望した。

(11) 是非読むと約束した。

(12) ・・・既婚がばれてからは「妻子とわかれる」とだましつづけた。

（同上:36）

引用句を副詞句ととらえ、α類はもともと「言う」「思う」などの動詞を伴わないと主張しているわけである。さらに、藤田（1999）は「と」でくくられる引用句とオノマトペ表現はコトバあるいはカタチを再現するという点でともにイコン記号的性格[6]をもつとの分析から、引用句自体に述語表現性が

あることを指摘している。その例として、α類のうち主体と述部が示す動作の主体が一致しない「『ごめんください』と戸が開いた」をあげ、「ごめんください」が従属節のような位置をとり、「戸が開いた」を主節とした複文的な構造と解釈できるとしている。α類はもともと引用動詞「言う」「思う」がない副詞句であるとする藤田の立場は「言う」などが省略されているとする鎌田（2000）に対立するものである。鎌田の立場については次項「オノマトペ表現」で述べる。

藤田（1988，1999）は引用成分と動詞の統辞関係に注目して分類したのに対し、砂川（1989）は、引用とはある場で成立した発言や思考を別の発言の場において再現することであるとする立場から、その引用文全体の発言の場と引用句に表された発言の場という 2 つの場[7]のかかわり方によって次の３つに分類している。

(13) どっこいしょっ、と子どもを抱え上げて徳五郎は・・・　（砂川 1989:363）

(14) 「どうしてこの子は、こう無口なんだろ」とお吉が嘆くように　（同上:361）

(15) 「ご飯が冷めてしましますよ」と食事を促した。　（同上:364）

（13）は引用句と述語動詞によって示される異なった 2 つの事態が同一場面に共存するもの（事態共存型）、（14）は発話や思考という一つの事態を、それを再現した部分とそれに注釈を加えた部分とに分節化して表したもの（単一事態型）、および、（15）のように動詞が引用句を必須の成分としていないものである。

「単一事態型」を、引用動詞の意味によって文が発せられる時の 3 つの言語行為（発語行為、発語内行為、発語媒介行為）に基づいてさらに 3 カテゴリー化した。これは藤田（1988）のβ類の下位分類にほぼ相当する。述語動詞が言語行為のカテゴリーを特定することについては、鎌田（2000:41）も分析を行っている。

これらの研究から「言う・聞く」といったいわゆる引用動詞だけでなく、他の動詞を含めたさまざまな動詞と引用句とのかかわり方がどう習得されるかという観点からの研究が考えられる。

2.2.3 引用句とオノマトペ表現

引用句の副詞節性を主張する柴谷（1978）や藤田（1988、1999）で「と」による引用とオノマトペ表現との連続性が指摘された。

鎌田（2000）

鎌田は引用の「と」を引用の助詞とみなし、(7)（8）のような例は基本的に「言う」などの引用動詞が省略されたものとする立場をとっているが、オノマトペ表現とのかかわりについてはどのように分析しているであろうか。

「と」でくくられる表現は、オノマトペ性が高く語彙性が低いほど「と」が必要とされ、逆に、オノマトペ性が低く、語彙性が高いほど「と」は必要でない（田守・スコウラップ:1999）とされる。

(16) 先生はちょくちょく｛*と／φ｝やってくる。

(17) 先生はバタン｛と／*φ｝本を開いた。

(18) 先生は答えがわからない｛??と／と言って｝本を開いた。

(19) 先生は答えがわからないよ｛と／と言って｝本を開いた。　（鎌田 2000:39）

(20) お嬢、お嬢って言うんですよ。　（同上:75）

オノマトペ性の低い頻度副詞の（16）では「と」が必要でなく、オノマトペ性の高い例（17）は「と」が必要である。また、間接引用の（18）では「と」だけより「と言う」の方が自然だが、直接引用の（19）では「と」だけでも適格性が高くなる。つまり、間接引用では「言う」を補う必要があり、直接引用ではそのオノマトペ性ゆえに「と」で導かれ、「言う」が省略可能となることから、もともと「と」は引用動詞「言う」の必須の補語を表示する助詞であると主張する。鎌田、藤田とも「と」の扱いについて対立した立場をとっているが、両者ともオノマトペ表現と引用のかかわりを認めている。

さらに、鎌田（2000）は引用の畳語表現（20）についても「と」が必要であることから、このような繰り返し表現と「現実自然界に間接的・比喩的に近づこうとした結果」（田守・スコウラップ:前出）生まれてくるオノマトペ表現との連続性を示唆している。

砂川（1989）は、直接引用から元の発言の場の再現という側面が失われ、二重の場が崩れて一重化したところに、オノマトペ表現を位置づけている。いったん擬声語にものまね的な音調が加わると引用句ととらえられることからも、両者の間に明確な線を引くことが困難であるとしている。

以上、「と」による引用句と畳語的表現やオノマ

トペ表現との関連性についての研究を見た。日本語はオノマトペ表現や畳語的表現が豊かであるとされる。オノマトペ表現と引用句とのかかわりをどうとらえるのかは統語的側面、語彙的側面からの研究が必要である。

一般にオノマトペ表現は学習困難点の一つといわれる。ここでは、擬声語、擬態語をオノマトペ表現としてひとくくりにして見てきたが、学習者の習得過程において個々の擬態語と擬声語がどう習得されるのか、それらが引用表現の習得とどういった関連性をもっているかを記述することで、オノマトペ表現と引用との関連の解明にひとつの視点をもたらす可能性もあろう。

2.2.4 直接話法と間接話法

引用研究において直接話法と間接話法は関心を呼んでいるテーマの一つである。

初期の研究には三上（1963）、奥津（1968）がある。三上（1963）はダイクシス、文体、「は」の「が」への変換などを間接化の特徴としているほか、直接引用は引用句が括弧でくくることができるのに対し、間接引用の引用句は明確には括弧で閉じることができないいわば「半閉じ」[8]の状態にあることを指摘している。奥津はダイクシスやモダリティなどに関する変換について、直接引用の間接化基本規則の記述を試みている。直接引用と間接引用[9]を細かく分析したものには以下のものがある。

砂川（1988，1989）

砂川は、先述したように引用文が２つの場によって構成されているとの立場から、直接引用と間接引用[10]における「二重の場」の有り様を分析している。直接引用では元の発話や思考の場がかなり忠実に再現されるため、聞き手に強く結びついた応答詞・感嘆詞や、無意味な言葉や外国語等でも「言う」などを述語とする直接引用で伝達される。一方、すでに多くの研究者が指摘しているように、間接引用の場合は元の発言の場が引用を行う発言の場にあわせて調整されねばならない。その調整のあり方を命令、質問、依頼など行為指示型の文の引用について検討している。

命令、質問、依頼など行為指示型の文の引用では引用句のダイクシス動詞の選択は元の発言の場で用いられる形式が優先され、引用の場に調整されることができない。

(21) 父は「あいつに金を送ってやれ」と母に向かって言ったそうだ。

(22) 父はおれに金を送ってやれと母に向かって言ったそうだ。

(23) *父はおれに金を送ってくれと母に向かって言ったそうだ。

（砂川 1989: 372）

（21）の引用句は命令・要求で、聞き手に対する動作要求である。その場合の動作とは、命令を発している主体の側から見た動作でなければならず、この命令文を間接引用したときも（22）のようにそこで要求される動作は命令主体の視点から見たものでなければならない。したがって（23）のように引用者の視点が入り込むことはできない。

同様のことが質問文や依頼文にも言える。

(24) 彼は「あしたの午後<u>来られます</u>か」と聞いた。

(25) 彼は今日の午後<u>来られる</u>か聞いた

(26) 彼は今日の午後<u>いける</u>かと聞いた。（（25）と同義ではない）　（砂川 1989: 373）

直接引用の（24）を間接引用にするには、ダイクシス動詞は、（25）のように元の発言の場で発せられたのと同じ形式を再現させなければならず、（26）のように文全体の話者の視点に変えると（24）とは異なる意味を伝えることになる。

つまり、述べ立てや意志表明などの文のダイクシス動詞が引用者の視点による調整を受けられるのに比べ、命令文や質問文など行為指示型の発言のダイクシス動詞は元の場への結びつきが強力であると分析している。

発話時における話し手の心的態度であるモダリティについては、引用句中のモダリティは引用文の話し手のモダリティではなく引用された発言の話し手の心的態度あるため、間接引用句の中に現れるモダリティ表現は制限されるとし、次のような例をあげている。

(27) 「犯人は十中八九その男にちがいない。」

(28) 彼は犯人は十中八九あなたにちがいないと思い込んでいる。

（砂川 1989:377）

(29) 「この勝負は残念ながら僕の勝ちだね。」

(30) かれはその勝負は残念ながら彼の勝ちだと言った。

（砂川 1989:378）

（27）の発言は（28）の引用句に入ることができる。「たぶん、きっと、必ず、もしかしたら」などと同

じように命題内容の真偽の度合いについて話者が発話時において下す査定的判断を示す「真偽判断の副詞」[11]は、命題内容めあてのモダリティ表現であるため、(28) のように間接引用に用いることができる。一方、(29) の発話を引用した (30) では間接引用、直接引用の二つの解釈が可能であるが、直接引用の解釈が優先する。「価値判断の副詞」(あいにく、残念ながら、嬉しいことに、等) や「発語行為の副詞」(要するに、実は、等) などの聞き手めあての伝達的モダリティ[12]や、聞き手への配慮を示す「です・ます」や終助詞などは直接引用の読みを促す。つまり、聞き手めあてという伝達機能がより強いモダリティ表現は間接引用句の中に収まりきれないわけである。

英語で命令文や質問文が間接引用される場合、語順や引用句の形式が変わり元の発話にあったモダリティが失われるのに対し、日本語では元の語順そのままで間接引用句に用いることができることや元の発話の時制が保持されることも考えあわせると、日本語の間接引用句が英語よりはるかに広い範囲のモダリティ表現を取り込みうる。こうした話法のあり方はかなり完全に近い形で場の二重性が保持されていることを示すものと結論づけている。

鎌田 (1988, 2000)

砂川が引用表現における「場の二重性」と「元の発言の場の再現」を主張したのに対し、鎌田 (2000) は、引用とはある場で成立した発話、思考を新たな場に取り込む行為で、元の発話の持つ意図を伝達者が理解し、伝達者が表現意図に応じて新たな場と発話を「創造する」言語行為と位置づけている。

新たな (元) 発話の場の創造		(元) 発話の伝達の場への吸収
直接引用	←――――――→	間接引用
(−)	視点調整の原理	(+)
(+)	発話生成の原理	(−)

図1　引用句創造のプロセス　(鎌田2000: 96)

話法には命題やダイクシス表現やモダリティ表現が深く関与している。これらの関与のし方を調整するのが「視点調整の原理」と「発話生成の原理」であるとしている。図1のように直接引用では進行中の会話の場への視点調整は少なく、新たな発話の場の生成はより明確に表現されるのに対し、間接引用では視点調整の度合いが増し、発話の生成は抑えられる。つまり、引用表現を、「視点調整の原理」と「発話生成の原理」に従ってダイクシス表現やモダリティ表現が調整され様々な形態で現れる連続体としてとらえているわけである。その中でダイクシス表現やモダリティ表現の調整が制限されたり十分行われない中間的な話法を準直接引用と準間接引用と命名している。

(31) 私が任命されるかもしれないと娘がわたしをよろこばせた。

(32) 私が任命されるかもしれないわと娘がわたしを喜ばせた。

(33) 私が任命されるかもしれませんと娘がわたしを喜ばせた。

(鎌田2000:158)

(34) 彼はみんなに帰りたいと言っているけど。

(35) 彼はみんなに僕が帰りたがっていると言っているけど。

(筆者作例)

準直接引用とは元発話者の視点を残しながら、つまり、視点調整がなされていないのに、終助詞などがなく間接引用の読みを許す (31) のようなものである。(32)、(33) は「わ」や「ます」などの「スタイルのモダリティ」が引用句に劇的効果を付加された直接引用になっているのに対し、(31) はモダリティがない状態であるため、引用句の「私」が元話者でも伝達者でもあり得る2通りの読みが可能なわけである。

準間接引用とは、引用句の主格には視点調整が行われているが、述語では視点調整も発話生成も行われていない (34) (35) のような例である。独立文において感情・知覚表現は「私＋～タイ」「彼＋～タガル」と主格選択が限定される。ところが従属文である引用句 (34) (35) では独立文の「私＋～タイ」「彼＋～タガル」という関係が崩れ、「彼＋～タイ」「私＋～タガル」という共起関係になり、文のすべての要素が伝達者の視点に調整される中で、モダリティ部分には元話者の視点を残さなければならない。文の適格性を保持するためにモダリティ部分で間接引用の特徴である視点調整 (＋) の原理を破らざるをえないところから、このような引用表現を「準間接引用」と呼んでいる。

鎌田は、引用表現とは進行中の発話の中に新たに発話の場を創造する言語行為であるととらえ、話法は視点調整、発話生成という2つの原理に従って調整されて表される一つの連続した言語表現とした点に特徴がある。

藤田（1985）廣瀬（1988）遠藤（1982）

藤田（1985）は思考・認知を意味する引用動詞をもつ引用表現について、直接話法と間接話法の読みが転換される境界について分析している。「思う」「感じる」「考える」「見る」「知る」の 5 つの動詞について、Ⅰ述語末要素（だ）、Ⅱ助動詞（らしい、だろう）Ⅲ終助詞（な、ぞ／わ）、Ⅳ間投助詞（さ、よ、ね）、Ⅴ感動詞 a 類（アッ、等）、Ⅵ感動詞 b 類（オイ、等）の 6 つのムード的要素が許容されるかどうかを調べ、その許容度の低い順に並べた結果、Ⅰ～ⅡとⅢ～Ⅵの間に話法の読みが転換される境界があると指摘した。そして、直接話法と読まれるか間接話法と読まれるかは引用動詞のレキシカルな意味によってⅢ以上のムード生起が許されるかどうかで決まるとしている。

廣瀬（1988）は引用表現の中で、「犬はイヌと読む」は音韻的側面をとらえており、「dog はイヌという意味である」では意味論的側面をとらえていることに注目し、直接話法と間接話法の区別も、引用される言語表現のレベルと違いとしてとらえ分析を行っている。

表現行為には心的状態を引用し伝達を目的としない非聞き手志向の「私的表現」と伝達を意図する聞き手志向の「公的表現」の２種類がある（ただし、独り言は自分への公的表現とされる）。「公的表現」は終助詞、命令表現、呼びかけ、応答表現、「です、ます」などによって特徴づけられる。例えば、出かけようとして窓の外を見た時、雨が降っていると分かった時の表現として次のようなものある。（＜＞私的表現、[] 公的表現）

(36) 太郎は＜雨だ＞と思っている
(37) *太郎は［雨だよ］と思っている
(38) *太郎は［雨です］と思っている
(39) A は B に［雨だよ］と言った
(40) A は B に＜雨だ＞と言った

（廣瀬前出:10）

「思う」は心的状態を表し、引用句に公的表現をとりえないため、私的表現の（36）は正文だが、伝達が意図された公的表現行為を表す（37）（38）は非文となる。一方、発話動詞「言う」は表現行為を表せるため、引用句に私的表現と公的表現のどちらもとることができる。A が B に「雨だよ」と言った状況を記述する際、（39）と（40）が可能となる。 ここから、（39）は引用句が公的表現で表された直接話法であり、（40）は引用句が私的表現で表された間接話法であると分析している。

遠藤（1982）は日本語の直接話法と間接話法を連続体ととらえ、引用表現の間接化にはどのような文法規則が働き、また文法以外のどんな要素が間接話法化に関与するのかを明らかにしようと試みている。話法を間接化の程度により、完全直接話法、一般直接話法、修正直接話法、一般間接話法、拡大間接話法に下位分類しつつ、これらの区別はそれほど厳密なものではなく、むしろ濃淡のグラデーションのように連なっているものとしている。

話法変換の基本となる発話意図（文種）は相手に働きかける気持ち（伝達性）の低いものから高いものへと→の方向に沿って次のように並べることができる。

↓断定・感動・疑問・推量
↓希望・意志
↓質問・勧誘・依頼・命令・確認
↓応答・挨拶・よびかけ

（遠藤前出:89）

伝達性の高いものほどそのままでは間接引用になりにくく、挨拶表現のように表現内容よりもむしろ「言うこと自体に意味のある」（遠藤前出:87）文は、場を移して（間接引用で）正確に伝達することは難しいことなどを指摘している。直接話法と間接話法を連続体ととらえる点は鎌田（2000）と類似しているが、直接性、間接性は発話意図（文種）の伝達性の度合いによって決まるとしている点が異なっている。

久野（1978）

久野は授受表現の「視点」[13]（empathy共感）に焦点を当て、様々な不適文を吟味しながらさらに詳細に検討を加え、引用表現が談話の規則によって規制されることを汎言語的に検証している。

(41) *太郎は僕にお金を貸してやった。
(42) 太郎は「僕は X にお金を貸してやった」と言いふらしている。
(43) 太郎は、僕にお金を貸してやったと言いふらしている。

(44) ??太郎は、僕にお金を貸してくれたと言いふらしている。

（久野 1978:274;275）

例（41）は、授受表現において発話当事者は常に自分の視点をとらなければならず、自分より他人寄りの視点をとることができないという制約（「発話当事者の視点ハイアラーキー」久野 1978:146）に違反しているため不適格文となっている。直接話法の（42）の第 3 者 X が文全体の話し手の「僕」に変換された間接話法(43)は適格であるのに対し、表層文の視点制約にかなう(44)の「～くれる」が不適格文になっている。

(45) 太郎が、「前に君にお金を貸してやったことがある」と、電話をかけてきた。

(46) *太郎が、前に僕にお金を貸してやったことがあると、電話をかけてきた。

(47) ?太郎が、前に僕にお金を貸してくれたことがあると、電話をかけてきた。

（久野 1978:276;277）

直接話法（45）に対する間接話法（46）の適格性については、人によって違いがあるが、著者は（47）より不適格文と判断している。これは、「言いふらす」という動詞が示すように、(42)の「引用句」が文全体の話し手以外の聞き手に対する発話であるのに対し、（45）は文全体の話し手（伝達者自身）への発話であるという違いによるものであるとしている。

つまり、やりもらい表現が含まれた引用句では文全体の話し手がその間接話法節の聞き手でない場合と聞き手である場合では視点制約と不適格文の生じ方が違うことから、間接話法化と視点制約が談話の中で極めて複雑な関係にあることを指摘している。

以上の研究から、話法は引用句の文構造やダイクシス表現、モダリティ表現、引用する動詞の意味、あるいは元の発話の伝達性などと直接かかわっていること、授受表現が引用される場合、さらに複雑な制約が生じることなどが明らかにされている。しかし、副詞と引用表現の関連については、まだ研究の余地が残されていると言えよう。

学習者言語における引用表現の習得を研究対象とするとき、上のような要素は学習者の日本語の能力と相関してくると推測される。中でも「やりもらい」は学習者の学習者困難点といわれる。話法の習得には学習者の言語能力が深くかかわっていると言えよう。

2.3 談話分析的観点からの引用研究

井上（1983）寺倉（1988）

井上（1983）は新聞や論説文に頻用される「という」でしめくくられる表現[14]の談話的機能を分析している。この表現が頻用されるのは、情報源である人物に視点を置き、自分の情報として伝達する「直接形」（Kamio1979；神尾 1990）を用いてその人物の直接体験を語らせ、生彩のある「語り」を構成しておいて、かつ日本語の談話文法の原則を守って伝聞のモーダルを付け加えることができるためで、このような表現形式を報告文に混じり込ませることによって、新情報を生き生きと伝えることができるとしている。

寺倉（1988）は日本語における「描出話法」という言語行為を分析している。

(48) 「（わたし）今日彼とは会いたくないわ、絶対に！」とメリーは言った。

(49) メリーは、（自分は）その日絶対に彼と会いたくないと言った／思った。

(50) （自分は）今日彼と会いたくない、絶対に！（とメリーは言った／思った。）

（寺倉前出:81）

（48）は直接話法で、（49）は間接話法である。そして、（50）が描出話法である。この話法では人称と時制については間接話法（49）の被伝達部と同じであるが、感嘆表現の存在、時の副詞がそのまま入っているところは直接話法（48）と同じである。

物語の中には主筋的事象を述べる文と副次的事象を述べる文がある（Hopper 1979）。日本語の物語では前者は過去形「た」、後者は非過去形「る」で表される傾向があるが、両者の交替は文体の問題とされている（曽我 1984）。これについて寺倉はこの交替は自由ではなく、「る」を「た」に変えるとおちつきが悪くなるものがあり、そういった文を描出文であるとしている。日本語の描出話法は主人公の思考や感情を表すのに用いられ、しばしば物語の副次的事象を表す文の中に使用されていると指摘している。

メイナード（1997）

メイナード（1997）は引用表現を談話分析的、語用論的観点から行ったものである。既に、Maynard（1984，1986）は文学作品を対象に「と」、「ことを」「ということを」について分析を行い、

「と」の使用が複数の視点を同時に表現する機能を果たすことを指摘している。その後、メイナード（1997）はバフチン[15]の文学論による「声」の多重性に注目し、「引用内容は確かにだれかが言ったことをレポートとするのではなく、あくまで引用者の創作であり、それは引用者の『声』、視点、発想法を表現する一つの表現手段である」（メイナード前出:145）とし、以下のような分析を行っている。

引用表現では言語行動に直接言及することができ、引用する者と引用される者という少なくとも２つの声を同時に文脈に導入することができる。

(51) 竹下：これは池田先生も国会のことはよくご存知であると思います。いやあの今まで高橋先生の関係もよく存じておりますし、お久し振りですと言いたい気持ちでございますが、先生そこんとこはですね、ことごと左様に青木君を私が信頼しておったわけでございますから、そのようにご理解をいただきたいものだと思います。

（メイナード前出:151）

（51）は竹下登元首相が国会に喚問された時の答弁の一部である。「お久しぶりですという言いたい気持ち」に現れる友達として語りかける立場と証人喚問でふさわしい態度をとろうとする前総理としての立場が共存している。さらに、このような複数の声がどのような対話関係にあるのかを、新聞コラムと少女マンガという異なったジャンルの談話分析を通して探ることで、発話内容に対する様々な態度（強調、発話行為を薄める）や引用によって他者の「声」を自身の主張の代弁者として利用する表示など引用表現のレトリック機能を明らかにしている。

加藤（1998）許（1999）

加藤（1998）は話し言葉における「と」で終止する文の機能を探り、次の４つに分類が可能としている。A）基本的に無標なもので、後ろに「と言う」「と思う」が省略されているもの、B）発話内容が現在の場とは異なる場に位置する「物語」であることを表示、（「９時に社長に会ってと、11 時に懇談会があってと」）C）先行文脈から論理的に導かれた命題であること（「・・・現実はその逆であると」）、D）メタ言語的な発話の場を新たに作り自己の発話に距離を置くという語用論的機能（「もうやめとこうっと」）を与えるものの４つである。これらは「引用された発話の場を新たに作る」という「と」の機能が基になって話し言葉の中に様々に実現されたものと指摘している。

引用表現「って」の談話機能について分析したものに許（1999）がある。談話に見られる「って」には第三者の話を引用して説明する、相手に働きかける、自分の考えを引用して説明するという 3 つの用法があるとしている。また、「んだって」は話し手が規定命題を使って説明、あるいは主張する場合などに使用され、「って」より使用範囲が限られていると指摘している。

以上 2.3 では「と」のよる引用表現について談話分析の観点からの引用表現研究を概観した。

L2 としての日本語の自然習得では語用論的能力が習得されやすいとされる（長友 2000）。では、このような談話的な引用表現の習得はどうなのであろうか。学習者日本語の統語的側面からの習得研究だけでなく、談話機能をどう習得するのかという語用論的側面からの引用表現の習得研究はまだあまりなく、大きな可能性を含んでいるといえる。

3. 引用表現の習得研究

3.1 L1 日本語における引用表現の習得

幼児の L1 日本語の習得研究には岩淵・村石（1968）、大久保（1967）、Clancy（1985）伊藤（1990）などがある。中でも大久保、Clancy は長期に渡る縦断的研究を行っている。

（以下データの記載論文は大久保：［大］、Clancy：［ク］[16]と表示する。）

(52) なあーにって （1 歳 6 ヶ月） ［大］

(53) アーンって泣いてるの (1 歳 8 ヶ月) ［大］

(54) ブーンって飛ぶの（1 歳 11 ヶ月） ［ク］

(55) あしたおまつり行くんだからだって（1 歳 10 ヶ月）［大］

(56) 「オギャアオギャアと生まれたよ」というおはなし。(2 歳 1 ヶ月) ［大］

(57) おかし食べるってゆった（2 歳 1 ヶ月）［ク］

まとめると大体次のようになる。習得の初期段階では、一語か音を「って」で引用する（52）。「って」の後の引用動詞が省略された終助詞的な形である。これは動作に付随して考えや発話や音を表す典型的方法で、日本語のカジュアルな会話で非常によく見られる。そして、動作動詞を伴う「って」（53）（54）や、終助詞的な「だって」（55）が表出される。「と」は「という N」で少しおくれるようであ

る。「言う」などの引用動詞と連接した形式（57）は多語期にはいると同時に表出され、この時期では引用表現が統語的に最も複雑で長い文構造を構築していることを報告している。

Clancy は構造の違いから英語の L1 習得との比較は困難であるとしつつも、L1 英語の幼児の引用表現の習得について、that のない引用（Tell him wake up）は and と前後して産出されること、音の引用に say と go（Cows go “moo”）が 1 歳 11 ヶ月～2 歳 5 ヶ月で使用されること（Limber1973）、それに対し、補文標識を持つ補文構造は表出がおそいこと（Eisenberg & Renner 1981; Bloom, Lahey, Hood, Lifter & Fiess 1980）を紹介している。

日本人の幼児言語はアメリカ人の幼児言語より引用表現が頻繁で、他の補文標識や動詞連接文の表出以前に引用の「って」が表出される理由として、Clancyは言語的要因と文化的要因をあげている。言語的要因として、オノマトペ表現の豊富さと、引用表現が統語的発達というよりむしろ終助詞のような形態素「って」が使用されるという文法構造の容易さをあげている。日本語の埋め込み文は英語の埋め込み文のような時制の一致などの難しい点はないが、埋め込み文の使用は引用動詞の省略された「って」でまず練習されるのではないかと指摘している。そして、文化的理由として母親の子どもに対する社会慣習の教育に伴うインプットなどをあげている[17]。

これらの研究から L1 日本語の習得において「って」が動詞を連接しない終助詞形式でもっとも早く表出され、「だって」「という N」「っていう」などが表出されることが明らかになっている。

3.2 L2 日本語における引用表現の習得

3.2.1 補文構造の研究

先述したように引用表現の習得研究はまだあまり見られない。引用文は構造的に補文構造ともとらえられる。そこで、生成文法の観点から引用にかかわる補文構造の習得研究を 2 つ紹介する。

Kaplan（1993）

Kaplan（1993）は、JFLの日本語学習者を対象に、成熟性仮説[18]の検証を目的に日本語の機能範疇の習得を縦断的に研究し分析を行っている。

この研究では「と」「か」「かと」などの項目を普遍文法の観点から補文標識ととらえ、補文構造の習得を分析している。調査には、たとえば、「私は田中さんがきれいだと言いました」（I said that Mr/s Tanaka is pretty.）「行くか聞きました（(I) asked if (she) is going.）」「行くかと聞きました（(I) asked, “Is (she) coming?”）」などの正用文と補文構造の誤った文とを同時に提示し、その中から正用文を選択する文法性判断テストと、研究者が口頭で述べる文を模倣するタスクを使用した。その結果、補文標識 that にあたる「と」と、相当する英語の補文標識がない「かと」は容易に習得されたが、補文標識 if／whether に相当する「か」は容易ではなかった。他の調査項目の分析と総合した結果、機能的範疇は L1 習得時に生物的成長と共に出現するという成熟性仮説と矛盾すると結論づけている。

さらに、英語に相当する標識がある「か」は習得困難で、相当する標識がない「かと」が容易に習得されたという結果から、L1 にない機能範疇は習得しにくいという予測も否定された。「と」は英語で対応する補文標識 that が存在するため、L1 からの転移が疑われるものの、「と」は義務的である点で削除可能な that と異なるにもかかわらず、なぜ容易に習得されるかも明確ではないとしている。また、「か」より「かと」を習得されやすい理由は明らかではないが、「と」は補文標識として明確であるが、「か」は疑問の終助詞ととらえられているからではないかと推測している。

Kaplan の研究は「と」「か」「かと」を普遍文法の観点から補文標識ととらえ補文構造の習得を分析したものである。「と」を引用標識とする引用表現の習得研究ではないが、引用表現として Kaplan の実験文を見てみると、Kaplan の英訳では「行くか聞きました」（(I) asked if (she) is going.）、「私は田中さんがきれいだと言いました」（I said that Mr/s Tanaka is pretty.）は間接話法に解釈され、「行くかと聞きました」（(I) asked, “Is (she) coming?”）は直接話法と扱われている。

日本語では「行くか聞きました」は「*行きますか聞きました」のような丁寧体で表すことができない間接話法である。一方、「行くと言いました」「行くかと聞きました」はどちらも「行きますと言いました」「行きますかと聞きました」とできる直接話法とも間接話法ともとれる形式である。直接話法的解釈が可能な表現と習得になんらかの関連性を探ることもできるかもしれない。

また、Kaplan の分析には文法性判断テストと模倣テストが用いられているため、模倣において自発

的な訂正反復が見られたとはいえ、実際に産出するまでの習得がなされているがどうかは不明である。

白畑（2000）

白畑（2000）は、機能範疇は初期から出現するという仮説について、英語を母語とする学童（8 歳、11 歳）を対象にL2 としての日本語習得を縦断的研究によって検証を試みている。その結果、機能範疇が使用可能であっても表示すべき言葉がわからないため表出されない場合もあるが、機能範疇はL2 の習得初期から使用可能であると結論づけている[19]。

紹介されているデータを見る限りでは引用を示す標識が明示的に現れている。日本滞在 2 ヶ月目で「シジネイ、エスパルス、勝ったって」「Professor、お母さんいいって」をはじめ、3 ヶ月目には「曽根先生ね、どうしたって言った」が表出されている。引用の標識はすべて「って」が使用されており、「と」の例は示されていない。教室で日本語教育を受けているかどうかには言及されていないが、学童という年齢から学校で様々な書き言葉との接触はあると推測される。にもかかわらず書き言葉で頻用される「と」ではなく、「って」が習得されているようである。この結果は L1 日本語の習得研究において「って」の習得が早いことと矛盾しないと思われる。

3.2.2 引用表現の習得研究

Kamada（1990）鎌田（2000）

Kamada（1990）では米国の JFL 日本語学習者 6 名を対象に引用表現において働く心理言語的プロセスの解明を試みている。

大学の日本語夏期講座の参加者である学習者に対し、教授と子供に行ったインタビューから得た情報を口頭で報告するというタスクを与えた。

(58) はじめにあのう、Ｌさんが、Ｋ先生に、あのう「なぜ日本語教えていらっしゃいますか」と聞いたら、Ｋ先生が〈最初は大学は国語学の専門として、助詞、日本語の助詞がだんだんなくなってきたという傾向について論文をかきました〉　（〈〉は引用動詞・引用標識のない引用を示す）

（Kamada 前出:235）

その報告を分析した結果、次の 2 点が明らかになったとしている。まず、引用表現を習得していると思われる上級の学生でも引用標識のない非文法的な引用表現（58）が見られた。このような誤りについて、日本語では「・・という」という間接形で伝達すべき情報（Kamio1985; 神尾 1990）を、英語では一旦得た情報は自分のものとして伝達するために生じる誤りで、情報伝達に関する母語の影響の可能性を示唆している。対象とした学習者が日本語と英語の情報伝達形式の違いを認識していないことから、母語である英語の伝達形式を使用したと考えるべきで、単なる形式面の転移とは異なり情報処理の方法における母語転移の現象であると推測している。鎌田（2000）においても、同様の示唆を行っている。

二番目に比較的低い日本語能力レベルの学習者で直接引用を回避するストラテジー[20]が見られることを指摘している。

(59) あのう、その面接の前にAさんは「他のひとは本当にパーソナルな質問をしてちょっとこまりました、??こまった」といいました。

（Kamada 前出:235）

(60) 私はあんまり聞こえなかった。日本語の、あのう、きたない言葉、例えば、アメリカへ帰ってきてから、私の友達はあのう、??「きたない言葉を教えてください」と言って

（Kamada 前出:236）

（59）では強調された「本当に」と「た」形は整合しておらず、文体面で不適切である。（60）は臨場感豊かな引用をするために直接引用を行って、親しい友達の発話としては文体が不適切になった例である。つまり、文体の選択にはリスクが伴うわけである。

能力レベルの低い学習者が直接引用を回避するストラテジーを行使する理由として①直接引用は文体が多様であるため、単純な文体の間接引用を使用する、②教科書で引用は従属文の練習として導入され、引用表現が普通体の練習に使用され、引用句の文体が選択できることが教えられない結果、普通体が義務的であると認識されることを挙げ、その結果（59）のような過剰な訂正が生じるのではないかと指摘している。

杉浦（2001b，2002a）

杉浦（2001b）は、第二言語としての日本語を自然習得[21]したフィリピン人の女性 5 名の発話に表出された引用表現の引用標識を中心に分析を行った。その結果、引用形式は、①他者発話の引用は「引用標識なし・引用動詞なし」「だって・んだって」②自己発話の引用は「わたし＋言う＋φ」③思考の引

用は終助詞「かな・な」又は「と思う」（定型表現）と 3 種類の引用にそれぞれ異なった形式がまず使用され、その後、すべての引用に使用可能な引用標識「って」の習得によって引用表示が明確になっていくという仮説を示している（図 2）。

また、この 5 名のデータに見る限り、引用標識の「と」が使用される教室内習得者（Kamada1990; 鎌田 2000）とも、「って」が最も早く習得される幼児の L1 の習得（岩淵・村石 1968; 大久保 1967; Clancy1985）、L2 学童（白畑前出）とも異なっていると指摘している。

引用についての言語知識が不十分な学習者では、母親との母語での対話を引用する時に、引用句の待遇表現の使い分け（他者発話＝普通体、自己発話＝丁寧体）で元発話者を表示したり、推定・推測のモダリティ的表現の「と思う」の代わりに終助詞と聞き手への待遇表現を合わせた中間言語形式「かなです」を使用するなど、統語知識の不足を待遇表現で語用論的に補う方略の使用が観察された。

「だって」はひとかたまりで他者発話専用の引用標識ととらえられ、《(ナ）名詞だって》は他者発話のみを引用する独自の中間言語形式として学習者の中間言語体系に組み込まれていると推測された。もし〈ダッテ〉という音形がひとかたまりではなく、〈(ナ）名詞だ＋って〉という文法的な分析が生じていれば、引用標識は「って」となり、たとえば、「だめだって」《ナ名詞だって》は自己発話の引用でもありうるが、5 名のデータの自己発話の引用ではこのような例はまったく見られなかった。すなわち、〈名詞だ＋って〉という分析がないことは、自然習得の限界の一つであろうとしている。

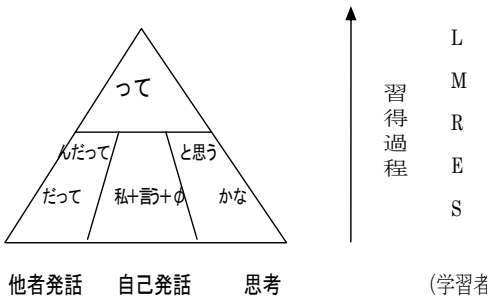

図 2 引用形式の習得仮説（杉浦 2001b:59）

杉浦（2002a）では杉浦（2001b）と同じ自然習得学習者 5 名を対象に直接話法の習得を「発話生成と視点調整」（鎌田 2000）という観点から分析を行った。その結果，学習者の引用表現の習得レベルにかかわらず、直接引用の使用が見られたとしている。

引用標識別に見ると、「引用標識なし」では直接引用的表現が多く見られたが、「だって」では終助詞が全く見られないなど直接引用的表現が抑えられた。「って」による引用では発話生成とともに視点調整もある引用表現が行われたとしている。

引用表現に関する知識を習得しているレベルでも「引用標識なし」がかなり見られた。これは呼びかけや終助詞など新たな発話生成を表示する要素が引用句に盛り込まれることによって引用伝達が容易に達成され，引用標識が冗長的な要素になり省略される可能性が推測されるとしている。

また、この 5 名の自然習得学習者で直接引用がかなり表出されたことは教室内習得者（Kamada:前出）とは少し異なるのではないかとしている。

杉浦（2001b，2002a）はわずか 5 名の学習者による事例分析にすぎず、引用表現の習得についてはまだあまり明らかでないと言ってもよい。教室内習得、自然習得にかぎらず、学習者の統語構造の習得過程の中で引用表現の統語構造がどのような発展を示すのかはまだ明らかではない。L2 としての日本語における引用表現の習得研究はまだ端緒についたところで、明らかにすべき点は多いといえる。さらに多様な母語の学習者に対する縦断的、横断的研究が必要であろう。次節で習得研究へのアプローチを探る。

4. 研究へのアプローチ

第 2 節において引用表現について統語的および語用論的研究と若干の習得研究について概観した。

引用表現の統語的研究のほとんどが「と」を対象としたものである。たとえば引用標識としてよく使用される「って」「だって」などの統語的研究は十分とはいえないし、「と」の拡大意味機能の研究

や、引用句と引用動詞の語順の問題はあまり研究が行われていない分野であろう。話法についてはかなり研究が行われているが、直接話法とオノマトペ表現とのかかわりや、引用と副詞とのかかわりについてはまだ研究の余地が残るところである。

また、引用表現研究に談話分析という観点が示された。「という」や「って」や「だって」については談話的側面から研究が行われ、引用形式による

前景化や多重な声を利用したレトリックなども示された。

第 3 節で概観したように、日本語の引用表現の習得については本格的な研究はまだ端緒についたばかりである。補文標識「と」「かと」についての研究や引用標識に関する研究がいくつかあるものの、引用表現自体に焦点をあてた習得研究は学習者の母語が限られ分析項目も少ない。

第 2 節から得られた引用表現の習得を捉える観点としては「と」「って」「だって」などの引用標識、引用表現の語順、省略、話法、引用とオノマトペ表現とのかかわりといったものが考えられる。また、話法の中では授受表現、指示表現、さまざまな副詞と引用とのかかわりなどの視点が考えられる。さらに、引用表現の統語構造の習得が第二言語の全体的な統語構造の習得過程の中でどのようなかかわりを見せるのか、という統語的習得の全体像との関連を記述する研究は、教室内習得であれ自然習得であれ、行われていない。また、筆者の管見するところでは、談話分析的観点からの習得研究はまだないと思われ、このような語用論的観点からのアプローチの可能性が示唆される。さらに、多様な言語の母語話者を対象とした縦断的および横断的研究が必要である。

注

1. 『日本語教育事典』(1982) 日本語教育学会編　大修館書店
2. 『国語学辞典』(1955) 国語学会編　東京堂
3. 本稿の「引用表現」とは他の場での発話や表された概念を進行中の会話に取り入れる引用を表現するとする。
4. 生成文法における句 phrase を指す。本稿の「引用された元の発話または思考」という意味での「引用句」ではない。
5. Austin (1962) の用語。発語行為 locutionary act とは、意味があり理解できる事柄を何か述べる行為のことである。発語内行為 illocutionary act とはある機能を遂行するために文を使うことであり、たとえば Shoot the snake.という発語は命令や忠告としての意図を伝達する。このような発言によってもたらされる結果や影響が発語媒介行為 perlocutionary act で、この文の場合ヘビを撃つことがそれにあたる(『ロングマン応用言語学用語辞典』1988 南雲堂)。
6. 記号には、対象を第一次性的に類似性によって表意する類似記号 (icon)、第二次性的にその対象と関係づけられる指標記号 (index)、精神、心的連合、解釈思想など第 3 のものの媒介によってその対象と関係づけられる象徴記号 (symbol) の 3 つ基本的な表意様式があるとされる。『パースの記号学』(米盛裕二 1981 勁草書房 143-144) 参照
7. 引用される発話は思考が引用文の発言に常に先立て実現されているわけではない。将来発言されるかもしれない内容や実際にはなかった発言の場を想定し、引用文の中で再現させている場合もある。(例：心配いらねえと言ってやりゃよかった)
8. 間接話法の「半閉じ」をもっともよく示す例として、命令文中の行き先を聞きそこねたときの聞き返しの「どこへ行けといわれたんです？」をあげ、疑問詞「どこ」が「と」をはさんで「です？」と呼応していることを指摘している。また、いくつかの文がピリオドを越えて引用の内容として後の「と言う」にかかる場合もある。
9. この外に、Coulmas (1986) は、直接引用はあくまで引用される発話者の言葉で伝達者 reporter はその役を演じているだけなのに対し、間接引用は伝達者の言葉であり、視点軸が伝達の発話場面にあると定義している。
10. 前述したように、砂川は引用文を「と」で引用句を受ける文に限っており、「話法」には他の表現形式も含むという立場をとっている。その意味での「話法」と区別するために「直接引用」「間接引用」という用語を使用している。
11. 中右 (1980) の用語。「文副詞の比較」『日英語比較講座第２巻　文法』大修館書店を参照。
12. 聞き手というのは発言の場における関与者であるから、聞き手めあての引用句が表している発言の場のほうが優勢になり、その発言の場を引用者の発言の場に調整することに強い抵抗が生じることになると説明している。英語の「真偽判断の副詞」probably と、「発語行為の副詞」frankly の間接話法とのかかわりについて廣瀬 (1988) が分析している。
13. 共感 empathy：文中の名詞句の指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感とよぶ。ジョンがメアリーを殴った場合、話し手は様々な記述が可能である。例えば、John hit his wife.はジョンに視点がおかれており、共感度はジョン＞メアリーで、逆に Mary was hit by John.でメアリーに視点がおかれており、共感度はメアリー＞ジョンとなる (久野 1978:134)。
14. 「夫の義明さんは体長を崩し、会社を休んでいた。午前 8 時 40 分に統子ちゃんを自転車に乗せて幼稚園に送りとどけたあと、自宅でるみ子ちゃんらの帰りを待っていた。正午のテレビニュースで事件を知った。現場が三人の帰り道だと知って家を飛び出した。途中、神明幼稚園の黄色いバッグを見た。胸騒ぎ。しかし、いつも三人がいつも立ち寄る、るみ子さん兄の八谷邦夫さん (38) 方にいるのではないかと思い、現場から約 300 メートル離れた八谷さん方に向かった。そこで 3 人が犠牲になったことを教えられたという。」(『朝日新聞』記事　井上 1983:116)
15. Bakhtin (1981, 1986) 等を参照。

16. Clancy は幼児言語の引用をローマ字で表記している。
17. 日本人の母親のインプットを見ると、アメリカ人の母親に比べて、社会的に必要とされる定形表現を教える表現やオノマトペ表現が多く見られる。また、他人の言うことに注目させようとする言語表現なども多いとしている。しかし、Clancy のデータは他の母親や子供と交流する文脈のものであるため、引用や報告形式が多いことも考えられ、方法論的に問題がある可能性も指摘している。
18. maturational hypothesis　成熟性仮説の文献としては Borer & Wexler (1987) などがあげられている。他の器官が成長のある時点になって出現すると同様に、言語のある部分（機能範疇）も子ども成長過程のある段階になって初めて出現するとするものである。
19. Lakshmanan & Selinker (1994)は幼児のＬ２英語の習得を分析し、補文構造は極めて初期段階から働いているとしているが、幼児の L2 の習得の初期段階では埋め込み文の that は義務的ゼロ標識で表されると指摘している。
20. Corder（1981）は学習者が困難な形式を回避し他の形式を使用するため誤りが少なくなることを「リスク回避ストラテジー」とよんでいる。
21. ここで「自然習得」とは、教室などでの形式面の教授をまったく受けないまま、社会的交流を通して第二言語を習得することを言う。

参考文献

伊藤克敏（1990）『こどものことば』勁草書房

井上和子（1983）「日本語の伝達表現とその談話機能」『言語』12.11, 113-121.

岩淵悦太郎・村石昭三（1968）「言葉の習得」『ことばの誕生』日本放送協会出版　405-418.

奥津敬一郎（1968）「引用構造と間接化転形」『言語研究』50，1-26.

大久保愛（1967）『幼児言語の発達』東京堂

遠藤裕子（1982）「日本語の話法」『言語』12.3 86-94.

加藤陽子（1998）「話し言葉における「と」の機能」『世界の日本語教育』8，243-256.

鎌田修（1988）「日本語の伝達表現」『日本語学』7.9，59-72.

鎌田修（2000）『日本語の引用』ひつじ書房

神尾昭雄（1990）『情報のなわばり理論』大修館書店

許夏玲（1999）「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育』101, 81-90.

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店 137-142.

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店 266-281.

柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店 80-103.

白畑知彦（2000）「第二言語獲得での機能範疇の出現：第二言語としての日本語獲得からの証拠」『JCHAT 言語科学研究会第２回大会予稿集』 89-94

杉浦まそみ子（2001a）「タガログ語母語話者による日本語の引用表現の自然習得」『2001 年度日本語教育学会秋季大会口頭発表予稿集』 91-96.

杉浦まそみ子（2001b）「タガログ母語話者による引用表現の習得－自然習得の場合－」『言語文化と日本語教育』22, 50-62.

杉浦まそみ子（2002a）平成 12，13 年度文部科学省研究補助金研究［萌芽的研究］「第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界」（研究代表者・長友和彦）報告書「日本語引用表現の習得－『話法』に注目して」42-52.

杉浦まそみ子（2002b）「自然習得における引用表現－話法に注目して－」『2002 年度日本語教育学会春季大会口頭発表予稿集』

砂川有里子（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学』7.9, 14-29.

砂川有里子（1989）「引用と話法」『講座日本語と日本語教育』4，明治書院　355-387.

曽我松男（1984）「日本語の談話における時制と相について」『言語』13.4, 120-127

田守郁啓・ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペ－形態と意味－』くろしお出版

寺倉弘子（1995）「『描出話法』とは何か」『日本語学』14.11, 80-90.

中右実（1980）「文副詞の比較」『日英語比較講座第２巻文法』大修館書店　159-219.

長友和彦（2000）「教室内日本語学習の可能性と限界：日本語の自然習得の示唆するもの」『追求卓越的日本研究国際会議論文』19-28.

仁田義雄（2000）『日本語の文法 3・モダリティ』岩波書店　158-159.

仁田義雄（1979）「日本語文の類型—主格の人称制限と文構造のあり方の観念について」林栄一教授還暦記念論文　集刊行委員会編『英語と日本語と』287-306.

廣瀬幸生（1988）「言語表現のレベルと話法」『日本語学』7.9, 4-13.

藤田保幸（1985）「『内的引用』における話法の転換について－話法転換の a 線－」『語文』第 46 輯, 14-21

藤田保幸（1987b）「「疑う」ということ－引用の視点から－」『日本語学』6.11，93-106.

藤田保幸（1988）「『引用』論の視界」『日本語学』7.9, 30-45.

藤田保幸（1999）「引用文の構造」『国語学』198　1-15.

堀口純子（1995）「会話における『って』による終結について」『日本語教育』85, 12-24.

三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院（復刊 1972　くろしお出版）

三上章（1963）『日本語の構文』くろしお出版 126-149.

メイナード・K・泉子.（1996）「引用表現と『声』の操作」『談話分析の可能性』くろしお出版 43-173.

山崎誠（1993）「引用の助詞「と」の用法を再整理する」『国立国語研究所報告 105　研究報告集 14』1-30.

山崎誠（1996）「引用・伝聞の『て』の用法」国立国語研究所研究報告集 17, 1-22.

米盛裕二（1981）「パースの記号学」勁草書房 143-144

Austin, J. L.（1962）*How to do things with words*, Oxford, Oxford University Press.（坂本百大訳 1978『言語と行為』大修館書店）

Borer, H. & Wexler, K. (1987) The maturation of syntax, In Roeper, T & Williams, E. (Eds.), *Parameter setting*, Dordrecht: D. Reidel, 123-72.

Bakhtin, M. M. (1981) *The dialogic imagination*, Ed. by M. Holquist, trans. by C. Emerson & M. Holquist, Austin, TX: The University of Texas Press.

Bakhtin, M.M. (1986) *Speech genres and other late essays*, Ed. by C. Emerson & M. Holquist. trans. by V. W. McGee, Austin, TX: The University of Texas Press.

Bloom, L., Lahey, L., Lifter, K., & Fiess, K.（1980）Complex sentences: Acquisition of syntactic connectives and semantic relations in complex sentences, *Journal of Child Language*, 7, 235-262.

Clancy, P.（1985）Acquisition of Japanese. In: Slobin, D.I.（Ed..）, *The cross-linguistic study of acquisition: The Data.* Vol. 1, Hilldale, NJ: L. Erlbaum Associates, 373-524.

Coulmas, F. （1986）Reported speech: some general issues, In Coulmas. F (Ed.), *Direct and indirect speech*, Berlin, Mouton de Gruyter, 1-28

Corder, S.P. （1981）The significance of leraner's errors, *IRAL*, 5, 61-70.

Eisenberg, A. & Renner, T.（1981）Acquisition of complex sentences in English: Similarity and variation across children. *Paper presented at the Sixth Annual Boston University Conference on Language Development, Oct.* Clancy に引用

Hopper, P.J.（1979）Aspect and foregrounding in discourse, *Syntactic and semantics, vol.12 :* In Givon, T (Ed.), *Discourse and syntax*, New York, NY: Academic Press, 213-241.

Kamada, O.（1990）Reporting Messages in Japanese as a second language, In Kamada, O & Jacobsen, W（Eds.）,*On Japanese and how to teach it: In honor of Seiichi Makino*, Tokyo: Japan Times, 224-245.

Kamio, A.（1979）On the speaker's territory of information: A functional analysis of certain sentence-final forms in Japanese. In Bedell, G. Kobayashi, E. & Muraki, M (Eds.) , *Explorations in linguistics*, Tokyo: Kenkyusha. 213-231.

Kamio, A.（1985）Territory of information and sentence forms: A contrastive analysis of Japanese and English, Invited lecture at 1985 conference on Japanese language and linguistics, UCLA.

Kaplan, T. I （1993）The second language acquisition of functional categories: Complementizer phrases in English and Japanese, A dissertation presented to the faculty of the graduate school of Cornell University.

Kuroda, S.-Y.（1973）Where epistemology, style, and grammar meet: A case study from Japanese, In Anderson, S. R. & Kiparsky, P. (Eds.) *A festshchrift for Morris Halle*, New York, NY: Holt, Reinhart and Winston, 377-391.

Lakshmanan, U. & Selinker, L.（1994）The status of CP and the tensed complementizer in the developing L2 grammars of English. *Second Language Research*, 10-1, 25-48.

Limber, J. （1973）The genesis of complex sentences. In Moore, T. (Ed.), *Cognitive development and the acquisition of language*, New York, NY: Academic Press, 169-185.

Maynard, S.M.（1984）Functions of *to* and *koto-o* in speech and thought representation in Japanese written discourse, *Lingua*, 64, 1-24

Maynard, S.M.（1986）The particle-*o* and content-oriented indirect speech in Japanese written discourse. In Coulmas, F. (Ed.), *Direct and indirect speech*, Berlin, Mouton de Gruyter, 179-200.

すぎうら　まそみこ／お茶の水女子大学大学院　応用日本言語論講座